

# 孤立児に関する心理学的研究<sup>注1)</sup>

## — 幼児期における —

荻野 桂

### 〔I〕問題

学級といつ一つの社会的集団内における孤立ということは、子どものそれぞれの発達段階において、それぞれに異なった意味を持つであろうが、この研究においては幼児期（特に就学期）における孤立的児童について検討を加えることとする。

孤立的な行動傾向が幼児期において持つ意味は次のようなものであろう。すなわち、これまでの両親または家庭といつ一つの保護的な閉ざされた小集団の内では、子どもの自己中心性、人格の未分化な状態はいつまでも持続しようとする。その際、もちろん両親からの、社会化を促進するような働きかけは多く認められるとしても、それは優れた者から未熟な劣る立場の者への、十分な配慮を含んだ働きかけであり、子どもの人格発達という観点からは問題ありとせねばならない。<sup>(2)</sup>一方、幼稚園といふ幼児集団は、他者への配慮を持たない対立的な存在と何らかの関係を保つていかねばならぬ場であり、その関係を保つかで、家庭ではなされ得なかつた面からの人格発達への働きかけがなされる。だから孤立的であることは、人格発達において重要な意味を持つ幼児集団内での人間関係が欠けすことであり、とくに就学期頃より著しく発達すべき自我が、十分な発達を示さないことにもなる。また、新しい社会集団への参加が十分できないということは、これまでの家庭における養育のされ方に多くの問題があつたことを示唆するものもある。

本研究においては、子どもの行動に影響する要因の基本的なものとして両親の養育態度をとりあげ、さらに、孤立児の行動傾向の特徴およびその変化の過程を追うために、時間見本法による行動観察を行なった。

これまでの孤立児に関する研究の多くは、ソシオメトリック・テストによって選び出された人気のある子ども（popular children）と孤立児（嫌われている子ども rejected children）との間の比較ということでなされ

<sup>(4)(9)(11)(12)</sup> ている。これらの研究の問題点は、第一に孤立児として取りあげられている幼児が、ソシオメトリック・テストにおける嫌われ者、他からの拒否を受けることが多い者のことであつて、本研究で問題とするような孤立児、すなわち他児から直接拒否されることも少いが受け入れられることも少ない子どもに対しては、十分な関心が払われていないことである。第二点としては、それらの研究方法が、ある一時点の行動傾向と種々の要因との間の関連を探るといった静的な方法が用いられていることである。対社会的な行動は絶えず何らかの変容を伴つてゐるものであり、要因についての検討もその変容との関連においてなされることが重要であろう。とくに幼児期における社会的な関係の変化は著しいものが考えられるから、発達的な観点はより一層必要とされるであろう。

以上のような点から、ここでは忘れられた存在としての孤立児の行動をとらえ、その変化の様相を明らかにして、諸種の要因、特に親子関係の要因との関連を中心として検討を加える。本研究の前半においては、孤立児群を人気のある子ども（popular child）と嫌われている子ども（rejected child）の二群との比較において検討し、後半においては孤立児を事例的にとりあげることにより、さらに分析的に検討する。

### 〔II〕対象

<sup>注2)</sup> 対象児は京都市のF保育園の園児20名である。1年保育組（M組）の幼児が9名、2～3年保育年長組（S組）の幼児が11名であり、この対象児はソシオメトリック・テストの結果に基いて選択された。内訳はTable 1に示す。孤立児群（以下I群とする）はソシオメトリック・テストにおいてほとんど誰からも選択されていない子ども、嫌われている子ども群（R群）は多くの子どもから拒否の選択を受けている子ども、人気者群（P群）は多くの子どもから好きだとして選ばれている子どもである。

注2) 家庭の社会・経済的地位は中程度であり、ほとんどがサラリーマンと自営商業者から構成されている。この保育園は現在幼稚園になっている。

注1) 本論文は、1961年提出の京都大学卒業論文に加筆修正を加えたものである。

Table 1. 対象児内訳

		I群	R群	P群	計
M組	男	1	1	2	4
	女	2	2	1	5
S組	男	1	1	3	5
	女	2	2	2	6
計		6	6	8	20

## 〔III〕手 続

## (1) ソシオメトリック・テスト

Biehler, R.F.<sup>(1)</sup> の方法を参考にして、顔写真の切り抜きと線画を用いて行なった。この方法はすでに小嶋が保育園児を対象にして施行し、各個人の選択・拒否の地位 (choice-rejection status) に安定性のあることが見出されているので、一応妥当な方法ということができよう。個別法で、「好きな人」「嫌いな人」の基準で 3 名ずつ選び出させ、その 3 名についての順位を得た。

第1回目のテストは1960年5月中旬、第2回目は同年9月中旬に行なった。このテストは、それぞれ行動観察期間のすぐ前に行なわれる様にした。

第1回と第2回の選択・拒否地位間の相関は、順位に重みをつけた場合、M組は .68、S組は .86 で一応の恒常性が認められた。

## (2) 時間見本法による行動観察

Parten, M.B.<sup>(7)(8)</sup> の観察カテゴリーを参考にして、リーダーシップ、社会的参与、社会的接触の三つの局面から幼児の行動観察を記録した。参加観察とし、1分間単位で観察した。観察の順序は予め定めておき、誰もがほぼ等質の時間に観察対象となる様にした。

第1期の観察は1960年6月21日～7月21日に、第2期は10月10日～11月7日に行なわれた。観察の時間は午前10時30分から40分間と、午後0時30分から40分間の自由遊びの時間、および午前10時からの作業のうち自由作業の時間である。

観察回数は各児について第1期・第2期とも各々約40回（範囲は35～42回）、すなわち一人について約40分ずつの観察時間があったことになる。観察者は筆者のみである。

観察の信頼性は折半法によって求めた。奇数回と偶数回との相関はTable 2に示した。一部には相関の低い項目もあるが統計的には有意であり、観察には一応の信頼

注) 第1位の選択に3、第2位に2、第3位に1の重みをそれぞれつけた。

Table 2. 観察の信頼性

		リーダーシップ	社会的参与	社会的接触
第1期	平均	.731	.660	.582
	範囲	.315～.960	.428～.821	.335～.733
第2期	平均	.848	.643	.556
	範囲	.748～.940	.507～.783	.400～.700

性が認められる。妥当性に関してはチェックすべきものなく、やゝ疑問の残るところである。

幼児の社会的行動には三つの局面が考えられる。第一はリーダーシップ、すなわち社会的役割の局面であり、子どもの行動の質が問題となる。第二は社会的参与の局面であり、子どもの社会的な関係における行動の量が問題となる。第三は社会的接触の局面で、これは第一と第二の点を背景に含んでいるのではあるが、もっと具体的な対人関係における交互作用の記録である。

各々についての観察カテゴリーは以下に示す。

## (i) リーダーシップ

追随的態度：他児の指示を求める。他児の指示に従う。  
独立的態度：指示も追随もせず、自分のしたいことだけをする。

指導的・追随的態度：時には指導し、また時には追随する。どちらともつかぬ行動をする。

指導的態度：他児を指示し指導する。特定の子どもと共にして指導する場合も含める。

## (ii) 社会的参与

無行為状態：表面上は全く遊んでいないように見える。  
しかし時々起る事などを注意して眺めてはいる。

一人遊び：他の子どもとはちがう玩具で一人で遊んでおり、他の子どもに近づこうとはしない。

傍観的態度：他の子どもの遊びを傍観して過ごす。ときどき話しかけたり、質問・示唆を与えたりするが参加はしない。

平行遊び：他の子どもの中にまじっているが独立して遊んでいる。並んで遊んでいるだけである。

連合・協同遊び：集団をつくって一緒に遊んでいる。集団意識の有無、活動の際の分業の有無等は問わない。

## (iii) 社会的接触

攻撃・排斥：敵意のある強い態度や行動を示す。たとえば叩く、除け者にするなどである。

強制・命令：他児の意志を無視してその行動を規制し、従わせる。

依存・追随：他児の手助けを求める、他児の「うとおり」に動き、他児のまねをする。

提案・助力：他児あるいはグループの活動に関して有意義な提案を行う。他児を積極的に助けようとする。

この社会的接触の四項に関しては、働きかけを肯定的に受け入れるか、それとも拒否したりしかえしをしたりするかという二つの相反する方向の反応の項を設けて、対象児から他児へ、他児から対象児への二方向の働き合いを共に記録するようにした。

### (3) 親子関係テスト

このテストは、子どもが認知している親の姿をとらえることによって親子関係の問題を把握しようとするものである。<sup>(11)</sup>住田・守坂等によって試作されたものに、さらに三つの場面を加え、計15場面の図版によって結果を得た。<sup>(12)</sup>個別検査によって、1960年7月中旬に行なった。

### (4) PFスタディ（児童用）

住田・林によって標準化された日本版を用いた。このテストは、子どもの人格構造をより詳細に理解し、前述の他の方法によって得られた資料の解釈の手掛りとするために用いられた。個別検査によって、1960年6月中旬に行われた。

## 〔IV〕結果と考察

### A 統計的検討

#### (1) 第1期における行動特徴

第1期の行動観察を通じて、幼児のある一時期における行動特性が明らかにされるが、特に三群間の比較を行うことによってより具体的に検討する。

観察の結果はTable 3に示した。まずリーダーシップについてみると、I群では他の2群に比較して独立的態度が極めて多く、指導的態度が極めて少い。追随的態度についてはI群とP群の間に有意な差があり、P群の方が多くなっている。R群とP群との間に有意な差はみられないが、指導的及び独立的態度はP群が多く、追随的態度はR群に多くなっている。社会的参与においては、

注) 15の図版は、次の語が子どもの欲求の表現として示されており、それに対する親の反応を子どもに求める。なお、このテストはその後、改訂が加えられている。

救助の場面「気分が悪いのです」「勉強教えて」「花瓶をわっちゃんた」「今日のテストあまりできなかった」「本かって」

I群は無行為状態および傍観的態度が他の二群に比してかなり多く、P群は傍観的態度等は少なくて連合・協同遊びが極めて多い。社会的接触においては、I群が他児へ積極的に働きかけるということは極めて少い。提案や強制の行為はP群に多く、依存はI群に一ぱん多い。R群は攻撃的行動が多く、他児への働きかけにおいて一番多く反撃を受けている。他からの働きかけに対する反撃も多いといえる。R群は依存や提案を受けることが多い。

各群毎にまとめると次の様になる。

(I群) 何もせずにぼんやりしているとか、一人だけで遊んでいることが多く、他児と共に遊ぶということは極めて少い。また、他児と共に遊ぶことがあるとしても、多くの場合追随的であり、他児からの指示に従って行動する。言語交渉もほとんど持たないし、他児からの働きかけを受けることも少い。

(R群) 他児と一緒にあそぶことはかなり多いが、その際協力的な関係を持つことが少ない。また一人だけで遊んだり、他児が遊ぶのを傍から観ているだけのこともある。攻撃的行動を示すことが他の二群に比して多く、働きかけが受容されないことが多い。他児から攻撃や制限を受けることも多く、提案をうけることは少い。

(P群) 他児と一定の規則の下で遊ぶことがその行動の多くを占め、その際に指導的態度を示すことが多い。それは具体的行為において、提案や命令の多さとなって現われている。また、それらの働きかけが受け入れられることが多い。他へ依存することは少ないが、他から依存されること、他から提案を受けることは多い。

#### (2) 第2期における行動特徴

第2期に見られた行動は、第1期の観察の結果と併せてTable 3に示した。この期の特徴については、第1期にみられた行動特徴との比較において検討することが必要であり、次節にその検討を譲る。

#### (3) 行動変容の検討〔I〕——各群別の比較——

I, R, P群各々についてその行動内容にどのような変化が見られるかを以下に検討する。

(I群) 行動変容に関する統計的検定を行なった結果

親和の場面「一緒にあそんで」「ちょっと来てごらん」「こんな絵描いてきた」「お母さん（お父さん）なんかきらい」「手つだわして」

独立の場面「ひとりでするよ」「遊んでくるよ」「あいさつするのはいや」「手を洗うのめんどくさいな」「さわらないで」

## 孤立児に関する心理学的研究

Table 3. 各群別の第1期及び第2期の行動観察得点(%)

観察 カテゴリー	群別	I 群		R 群		P 群		3 群間の差		3 群間の 変化の差
		1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	
リーダーシップ	追隨的態度	22.8	23.1	27.8	14.4	9.8	14.2	(I : P*)		
	独立的態度	67.8	62.3	48.0	51.1	54.6	33.5	*(I : P*)	*(I : P*)	
	指導的・追隨的態度	5.0	9.0	6.1	15.8	4.8	30.0	** (I : S**)	*	**
	指導的態度	5.0	5.2	17.8	18.8	31.0	20.7	(I : R*)	(R : S*)	
社会的参与	無行為状態	12.5	6.0	3.7	3.0	3.0	1.7	(I : S*)		
	一人遊び	13.3	10.0	13.5	5.7	8.5	4.8		(I : R*)	
	傍観的態度	16.3	15.1	10.6	10.7	7.2	7.4	(I : S**) (R : S*)	(I : S*)	
	平行遊び	29.6	33.3	36.5	38.0	27.9	24.8		(R : S*)	
	連合・協同遊び	28.5	35.5	35.0	42.7	53.4	61.2	(I : S*) (R : S*)	(I : S**) (R : S**) (R : S**)	
社会的接觸	他へ	攻撃・排斥	5.0	1.3	10.2	8.5	9.3	4.1		**
	強制・命令	4.6	5.4	14.9	11.2	16.9	14.4			
	依存・追隨	9.1	4.2	8.8	8.7	6.9	9.4			
	提案・助言	13.8	11.2	24.0	15.3	31.3	22.0			**
他から	他	攻撃・排斥	6.1	3.9	11.2	5.2	10.4	4.6		
	強制・命令	11.0	19.2	14.5	10.0	11.8	12.0			*
	依存・追隨	2.7	6.4	5.5	8.8	11.3	8.1	*		
	提案・助言	13.5	13.5	10.8	12.9	19.5	14.4			

\*\*は1%レベル、\*は5%レベルで有意(HテストおよびUテストによる)。

(Table 3), リーダーシップおよび社会的参与については有意差はみられず、社会的接觸において若干の差がみられたのみである。しかし、次のような傾向が認められる。リーダーシップにおいては独立的態度がわずかではあるが減少し、指導的・追隨的態度が増加している。社会的参与では、平行遊びと連合・協同遊びが増加し、無行為状態と一人遊びとが減少している。このことから孤立児は、他児との関係をより多く持つようになったという点で、望ましい変容を示しているといふことができるであろう。独立的態度の減少、追隨的態度の増加は、孤立児の場合には上記の意味において望ましい変化と考えて良いであろう。社会的接觸をみると、他への働きかけはやや減少が見られるが、他からの働きかけは増加している。攻撃や排斥を受けることが減少し、命令されること、依存されること等が増加していることは、彼らの

学級内での地位の上昇を予想させるものである。

(R群) リーダーシップに関しては追隨的態度が減少して、指導的・追隨的態度が増加している。社会的参与においては無行為状態、一人遊び等の低い水準の行動が減少し、連合・協同遊びが増加している。すなわち、社会的参与の水準が高くなると共に、集団内での地位も高くなっていると考えられる。これは社会的接觸の他からの働きかけの項における攻撃や強制の減少、依存や提案の増大となってあらわれていると考えられる。

(P群) リーダーシップについては独立的態度と指導的態度とが著しく減少し、指導的・追隨的態度が増加している。社会的参与においては、連合・協同遊びが増加しており、望ましい変化を示したといえるであろう。社会的接觸においては、一般に具体的交渉の数が減少する傾向にあり、その中でP群の示す依存・追隨行動のみが

# 個　人　研　究

増加している。この結果から考えられることは、一つには、対象としたP群の子ども以外に強力なリーダーが現われたためにP群の集団内の地位が相対的に低下したことであり、今一つは、他の子どもの全般的な地位の向上によって、彼らとリーダーシップを分ち合うものが多くなったということである。観察の際の全体的な状況から考えると、後者の方がより妥当な解釈のようである。

## (4)行動変容の検討 [II] ——各群間の比較——

各群間の変化の差について検定を行なったが、有意差がみられたのはリーダーシップの指導的・追随的態度の項 ( $P < .01$ ) と指導的態度 ( $P < .10$ ) 程度で、社会的参与や社会的接触については有意な差はみられなかった。それ故、こゝでは単に傾向を指摘するにとどめる。

(リーダーシップ) 追隨的態度においてはR群が減少しているが、他の二群はほとんど変わっていない。独立的態度はR群が増加しているのに対し、他の二群、とくにP群はかなり顕著に減少している。指導的・追隨的態度では三群とも増加しているが、P群の増加がとくに著しい。指導的態度についてはI・R二群がやゝ増加しているのに対し、P群は減少している。以上の点からリーダーシップの平均化の傾向を認めることができる。

(社会的参与) 三群ともにほぼ類似した傾向を示しており、傍観的態度はほとんど変化せず、無行為状態と一人遊びは減少、平行遊びと連合・協同遊びは増加 (P群の平行遊びのみは減少) している。しかし、I群は他の二群に比して無行為状態の減少が著しく、R群では一人遊びが、P群では一人遊びと平行遊びとが、それぞれかなりの減少を示している。これは各群においてかなりの比率を示していたより低次の行動様式が、各々より高次の行動へ変化したものと考えてよいであろう。

(社会的接触) 他への働きかけと他からの働きかけとで若干異なる傾向を示している。他への働きかけにおいては、三群共に減少の傾向がみられるのに対し、他からの働きかけにおいては一定の傾向は認められない。しかし、両者とも攻撃・排斥、あるいは強制・命令において減少の傾向がみられるのは、一般に保育園での経験を通じて社会化が進んだことを示唆するものであろう。

## (5)要因の検討 [I] ——PFテストによる——

各群における動特徴とその変化についてはすでに述べたところであり、以下それらの結果に影響を与えていくと思われる要因について考えていくことになるが、まず幼児のパーソナリティ、とくに欲求不満の処理をとおして見た精神発達の様相という点から、そのテスト結果

**Table 4.** 各群毎のPFテスト平均得点 (%)

テスト評点	群				注)
	I群	R群	P群	3群間の差	
$\Sigma E$	65.4	58.7	40.7	$P < .10$	
$\Sigma I$	12.0	15.7	20.0	—	
$\Sigma M$	22.8	24.0	39.3	$P < .10$	
O-D	28.6	21.7	13.6	$P < .10$ (I : S*)	
E-D	37.6	44.2	45.8	—	
N-P	34.6	35.0	39.8	—	
E-E	20.6	23.5	10.1	$P < .10$	
I-I	3.4	6.0	14.5	$P < .01$ (I : S*)	
G-C-R	34.2	43.7	56.4	—	

注) 3群間の差はHテスト、2群間の差はUテストによった。2群間の差\*は $P < .05$ を示す。

に基いて検討する。

主要な評点項目について、各群毎の平均を示したのがTable 4である。外罰傾向 ( $E' + E + e$ ) はP・R・Iの順にその比率が高くなっている、内罰傾向 ( $I' + I + i$ ) と無罰傾向 ( $M' + M + m$ ) についてはI・R・Pの順にその比率が高くなっている。各群毎にその特徴をまとめると次のようになる。

(I群) 他の2群に比して精神発達の指標 (GCR) が低くなっている。外罰傾向は強く、自分の行うことについて思慮をめぐらすとか、行なったことについて反省を加える等の行動が、同年令の他児に比して少なく、社会的規範の認識が乏しいと考えられる。

(R群) ほぼ全体の評点について標準に近い値を示しているが、E-E%がやゝ高く、I-I%が低いことから、現実に攻撃行動を示し、反省心にも乏しい傾向がうかがえる。またこの群の各個人についてみると、その得点にそれぞれ異なった偏りを示しており、平均すれば標準点に近づくとしても個々に問題傾向があると考えられる点が多い。

(P群) 全体に著しい精神発達の特徴を示しており、多くの評点について標準よりもより好ましいと考えられる値を示している。

以上の諸点に関して、行動観察の結果との関連を考えてみると、まずI群については社会的な技能そのものが低く、積極的に有効なやり方で自己を主張していないところに問題があるのではないかと考えられる。R群は積極性はあるが、身体的攻撃を加えたり悪口をいったりするため、仲間からの反撥をうけて嫌われていると考えられる。またP群は社会的な技能を十分に持っているために他の子どももうまくやっていける、あるいは他の

## 孤立児に関する心理学的研究

子どもをうまく指導していけるために仲間から受け入れられることが多いと考えてよいであろう。

### (6)要因の検討〔II〕——親子関係テストによる——

子ども、とくに幼児のパーソナリティ構造を決定し、発達の様相を規制する要因として、親子関係の在り方は極めて重要であると考えられる。こゝでは子どもの側から見た親の養育態度を、すでに述べた線画様式の検査を用いることによって明らかにし、その特徴を各々の群について検討する。3群の各評点についての得点は Table 5に示した。

(I群) 母親については受容的態度がかなりみられるが、拒否の方がはるかに多くみられる。父親からの拒否は非常に多く、受容は非常に少い。統制と支配の評点を

Table 5. 各群別の P C R T 平均得点<sup>(a)</sup>

評点		I	R	P	3群間の差
母 親	$\Sigma A$	C S	2.0 4.1	1.3 3.5	2.0 4.9
	$\Sigma R$	D R I	4.5 3.3 0.7	7.2 2.2 0.7	5.5 1.8 0.6
	その他		0.3	0.0	0.3
	C + D		6.5	8.5	7.5
	$\Sigma A$	C S	0.7 2.7	2.2 4.5	1.6 4.6
	$\Sigma R$	D R I	6.5 4.7 0.5	5.7 2.3 0.3	6.6 1.3 0.5
父 親	その他		0.0	0.0	0.4
	C + D		7.2	7.8	8.3

注) 得点は全得点15点中の得点である。3群間の差は H テスト、2群間の差は U テストによる。

合せた評点 (C + D) は親の統制傾向の強さを示すと考えらそるが、これは両親ともに他の二群よりも低くなっている。欲求拒否の評点 ( $\Sigma R$ ) のうちの拒否 (R) は両親とも他の二群よりも高くなっている。母親が受容を示してはいるが、それは服従 (S) であることの方が多い、時には全くあまやかし、時には全く拒否するといった、しつけ態度の一貫性の無さがうかがわれる。父親はほとんど情緒的に拒否しており、冷淡にとりあつかう

ことが多く、子どもに対する愛情に欠けているように思われる。このような親の態度のもとで子どもは十分な社会化をうけることができず、愛情欲求が満たされぬためにパーソナリティ構造に歪みが生じ、社会的に不適応状態を示すようになったものと思われる。両親間のしつけの態度のくいちがいも当然その重要な要因として働いていると考えられる。

(R群) 母親については受容的態度が少なく、拒否的態度がかなり多くなっている。統制傾向 (C + D) は他の二群に比してかなり強い。拒否的態度は主として支配 (D) の評点で占められており、子どもの欲求を理解しようとはせずに自分の思うとおり強力に働きかけることが多いと考えられる。これに反し、父親の方は他の二群に比して受容的であり、しかも受容的統制 (C) の評点が高いところから、子どもの欲求を受容しつつ、しかも必要な統制を加えていくといった、望ましい養育態度が考えられる。しかし、両親共に拒否 (R) の評点で P 群よりもやゝ高くなっていることは、両親の態度のくいちがいという問題の他に、態度の一貫性の欠除等の問題もあることを示すものであろう。

(P群) 両親ともほぼ類似した傾向を示しており、両親間の養育態度の一貫性が認められる。統制傾向 (C + D) は両親共に少なくなく、特に父親はその傾向が強いが、一方で共に受容的態度が強く、子どもを情緒的に受容しているために、統制的な働きかけが子どもにもつて強制的なものとしては受けとられていないと考えて良いであろう。

各群間の差の検定の結果 (Table 5)，母親の態度に関しては R 群と P 群の間に有意差があり、父親については I 群と P 群の間に有意差があった。I 群においては父親の拒否傾向が非常に強く、R 群は母親の拒否傾向が強くなっている。そして下位項目についてみると I 群の父親は情緒的に拒否することが多く、一方 R 群の母親は子どもを自分の思いどおりに支配しようとする傾向が強くなっている。

このような親の態度はかなり持続的なものであり、子どものパーソナリティや行動を決定づけるもっとも基礎的な要因の一つであると考えられる。そして実際にこの親子関係の在り方と子どもの学級内での行動との間の関係をみると、上ですでに触れたように母親が受容的であるのに父親が拒否的であると孤立的傾向をもたらし、母親が拒否的であるけれど父親が受容的な場合には皆から嫌われるような行動傾向をもたらしている。そして、両親ともやゝ同程度の平均値的な受容度を示している場合にはその子どもは学級内で仲間から受容されることが多い

い様である。しかしこれら興味ある傾向も、事例数が少なく、又男女の間の差についての検討も残されたままであるので傾向を指摘するに止めたい。

#### (7) まとめ

行動観察の結果、I群は孤立的傾向の行動を明らかに多く示した。リーダーシップに関しては独立的態度が、社会的参画に関しては無行為状態や傍観的態度が、他のR、P群に比して多く見られた。社会的接触では、全体的にI群の接触数は少なくなった。

第1期から第2期にかけて、I群においては指導的態度がかなり見られるようになり、無行為状態が減って、他の子どもと連合又は協同して遊ぶことが多くなった。なお、他の二群についてもそれぞれ望ましい方向への行動変容をみることができた。たゞリーダーシップについてP群のみが、これまで指導的であった子どもが他児と相互的または協同的なやり方でリーダーシップをとるようになったという点で、やゝ逆方向とも考えられる傾向を示した。具体的な接触内容については、どの群についても攻撃的なものが減少し、望ましい方向への変化があったと言つて良いであろう。

PFテストの結果からは、I群の精神発達が遅れており、パーソナリティ構造上の問題が多いことが示され、R群はほぼ平均値近く、P群はきわめて優れていることが明らかになった。

親子関係テストの結果からは、I群は両親から情緒的な拒否を受けることが多く、特に父親から拒否を受けることが著しく多いことが見出された。父親は子どもに対して愛情を感じていないと思われるほどである。R群は父親が受容的であるのに母親が拒否的であり、子どもに対して強い統制を加えようとする傾向が見られた。P群の子どもは両親から情緒的に受容されており、また必要な適度の統制もうけているようである。

## B. 事 例 研 究

### (1) 孤立児の類型

上の統計的な検討においては、孤立児一般と他の特徴的な子どもの群との比較が中心的なものであった。そしてそこでは、とりあげた要因間の相互の関係についての検討は不十分であり、その上、重要と思われる他の要因についての検討もなされなかった。この節では孤立児を類型的にとらえて検討を加えることにより、それらの要因の間のダイナミックな関係を捉えたいと考える。

孤立児を類型的に扱った研究には Northway, M. L. のものがある。<sup>(3)</sup> ソシオメトリック・テストおよび日常の

観察を通じて孤立児を見出し、臨床的な検討を進めるこことによって次の三つの類型に彼らをわけることができるとしている。第一は、社会的に引きこもりがちな子ども (Socially recessive children) で、目立った行動を示さず、周りの出来事に興味を示さず、他の子どもたちからその存在を認められていない様な子どもである。第二は、社会的な関心の少ない子ども (Socially uninterested children) であり、行動に積極性がなく、興味が絵画とか音楽などに向いており、はにかみ易い内気な子どもである。第三は、他の人に迷惑をおよぼす子ども (Socially uneffective children) で、たえず騒々しくしたり、言動が誇張的であったり、また粗暴・反抗的な子どもである。

本研究でとりあげた孤立児は6名であるが、彼等を個別に検討してみると、ほゞ上に記した三つの類型にあてはまるようであるが、第一の型については更に二つに分けて考えるのが妥当ではないかと思われる。すなわち、本研究の事例について考えられる類型は次の4つである。第一は、社会的に未成熟な子ども (Socially immature children) として表わすことができよう) で、社会的な関係を持っていくに足るだけの社会的な技能に欠けている。また、周囲のでき事にもあまり興味を示すことがない。第二は、社会的に引きこもりがちな子ども (Socially recessive children) であり、周囲のでき事に興味を持つつも、「内気」といった心理的特性のために社会的参画のできない子どもである。第三は、社会的な関心の少ない子どもである。これは Northway の第二の型にそのまま対応するものである。第四は、仲間から排斥されている子ども (Socially rejected children) として示され得るものである。Northway の第三の型にはほゞ対応していると考えられるが、孤立している一次的な原因を示すものとして “rejected” の方がより妥当な表現であると思われる。

本研究で扱った6事例について、その概略を Table 6 に表示した。この事例の分類は第1期の行動を主としてなされたものである。以下、各型1例ずつ検討する。

### (2) 類型1. 社会的に未成熟な子ども

(Socially immature children)

事例A、男児、1960年4月入園(1年保育)、CA: 5才9ヶ月、IQ: 113、家族構成: 祖母(72)、父(40)、母(37)、兄(11,9)、弟(3)

第1期の行動観察を通じて次の行動特徴がみられた。リーダーシップに関しては独立的態度がほとんどであつ

注) 検査時の年令を示す。

孤立児に関する心理学的研究

Table 6 事例研究対象一覧<sup>(注)</sup>

事例	第1期の行動	第2期での変化	母親の態度	父親の態度	P F テスト
類型 1	事例A 何もせずにぼんやりしているか、他の子の遊ぶのを横から見ていることが多い。	ほとんど変化は見られず、ぼんやりしていることが多い。	服従と拒否 一貫性なし	情緒的拒否	精神発達未熟
	一人ぼつんとしている。時々特定の子の後に従って歩いていることがある。	ほとんど変化は見られず、後について歩くことがやゝ多くなった。			精神発達未熟
類型 2	事例B 行動は緩慢で、表情に変化がなく、ほとんど一人でむっつり立っていることが多い。	他児と積極的に交わり指示、提案を与えるようになった。	受容しているが支配的	情緒的拒否 で支配傾向を伴う。	不明
	ほとんど一人で遊んでいる。仲間に入りたがる風を示すが認めてももらえない。	孤立傾向がより強まり他児との交渉が減少した。			精神発達は著しい。内罰傾向が大。
類型 3	事例C 主として独立的であるが、室内ゲームでは他の子と遊ぶことも見られる。運動を伴う遊びには参加しない。	一人でいることが多くなり、孤立傾向が強まった。	受容的だが統制はかなり強い。	服従的受容	精神発達は著しい。無罰傾向が大。
類型 4	事例D 交友があるが、対立的な関係が多い。他児への働きかけ、他からの働きかけに反撥や無視を伴うことが多い。	指導的な行動がやゝ増加し、遊びも協同のものがやゝ多くなった。	拒否的で支配傾向が強い。	支配的	精神発達未熟 外罰的

て、社会的参与では平行遊びと傍観的態度の占める割合が多く、無行為状態、一人遊び等もかなり見られる。他の子どもと遊ぶことはほとんどなく、ぼんやりしているとか、他の子どもが遊ぶのをたゞ見ていることが多く、他の子どもたちが追いかけっこでもはじめるとその後について走ることもあるが、積極的に働きかけることがないために他の子どもから仲間として認められることも少ない。弟が一緒に通園しているので、弟と一緒に遊んでいるところが見られるが、そのため一そろ同年令の子どもたちの間での孤立傾向が強まっているのではないかと思われる。言語交渉は極めて少ない。

第2期になると、リーダーシップについてはほとんど変化はないが、社会的参与については無行為状態が減少し、連合的な遊びが増加している。しかし、これもわずかであり、具体的にも、弟と二人でぼんやりしていることが多く、望ましい変化が認められたとは言い難い。

親子関係テストの結果によると、母親は子どもの欲求に対して、服従的に受け入れたり全く拒否したりして、いわゆるしつけ態度に一貫性のないことが認められる。一応情緒的に受容しているとはいえるであろうが、問題のある母親である。父親は子どもの欲求に対して理解を示さず、子どもを嫌っているようである。子どもは父親からの愛情を全く感じず、憎まれていると思っている様

である。このような親の態度から予想されることは、第一に子どもは情緒的なよりどころが得られず、そのため強い愛情欲求不満を持ち、情緒不安定性が著しいのではないかということであり、第二に、適当な訓練、とくに対人関係を持つ上で必要な種々の技能の獲得に欠けていなければならないか、という点である。

P F テストによると、G C R % が非常に低く、E % が非常に高く出ており、自分の欲求を他から承認されるようなやり方で表現できないことが示されている。また、e % に大きなプラスの反応転移がみられることから、誰かに頼りたいという欲求を持ちながらそれを表現し得ないでいることが考えられる。これらは上に述べた親子関係からの推測をうらづけるものであろう。

家庭では、兄2人と弟とはしっかりしており元気が良いのに、本児だけが無口で元気がない。母親は「理解が悪いようで、どうも皆となじまないようだ」と述べている。兄たちは本児の面倒をみてやるようであり、とくに除け者にするということはない。祖母に特別かわいがられる事もない。

以上の結果から、本児は家庭においてあまり認められず、必要な社会的訓練を受けることも少なく、一方情緒面でも安定性に欠けているため、社会的な場面に参与することができないものと考えて良いであろう。親子関係の在り方を何らかの形で改善することが必要な事の一つであると思われる。

注) 事例A, B, C, Dは本文で詳細に述べる。

(3) 類型2. 社会的に引きこもりがちな子ども  
(Socially recessive children)

事例B, 女兒, 1960年4月入園(1年保育), CA: 6才3ヶ月, IQ: 117, 家族構成: 曾祖母(79), 祖母(55), 父(35), 母(34), 姉(8)

第1期の行動内容についてみると、リーダーシップに関してはほとんど独立的であり、社会的参与に関しては無行為状態が多く、他の子どもと一緒に遊ぶことはきわめて稀であった。あらゆる行動は緩慢であり、表情は変化に乏しく、いつもむつりしていた。この期間の後半において若干他の子どものグループに加わって遊ぶことはあったが、ほとんど他の子どもに認められない程度に振舞っており、仲間はずれにされているような状態であった。しかし第2期になって著しい行動変容を示すようになった。まずリーダーシップに関して、独立的態度および追随的態度が減少し、指導・追随的態度が著しく増加している。社会的参与に関しては無行為状態、一人遊び、傍観的態度等の水準の低い行動は減少しており、連合・協同遊びが増加している。社会的接触も全体に著しく増加し、他児からの働きかけに対して自分の意志を表明するようにさえなっている。表情は明るく、言語交渉も積極的に行なうようになり、観察時間の多くで他の子どもと元気に遊びまわる姿が見られるようになった。

親子関係テストの結果、母親についてはかなり情緒的に子どもを受け入れており、救助を求めるとか親和を求める子どもの欲求に従うことが見られる。しかし、子どもの独立の欲求についてはそれを無視して支配的に振舞う傾向があり、あまり望ましくない、一貫性の乏しいしつけの態度が考えられる。父親は子どもに対して拒否的であり、情緒的な結びつきが少なく、子どもに対する支配傾向も強いようである。子どもにとっては怖い、非常に権威的な父親であると思われる。

PFテストは6月中旬に行なわれたが、本児についてのみどうしても反応をひきだすことができなかった。テストの場所へ連れてくると全く黙ってしまって、一言もしゃべらなくなるのである。

保母の家庭訪問の際の記録によると、第1期の観察期間中において、家庭では本児はきわめて元気がよく、姉と大声で話し合いながら遊んでいた。しかし、一步家から外へ出ると黙りこんでしまい、近所での友達も全くなかった。園での種々の作業は観察した限りでは手際よく仕上げ、運動機能も普通以上であった。これらの点から考えて、本児の場合精神発達の遅滞、能力上の欠陥などではなく、むしろ内気、はずかしがりといったパーソナリティ特性のために、保育園という社会集団への適応

がやゝ遅れたと考えるのが妥当であろう。

本児の行動に著しい変化が認められるようになったのは第2期観察をはじめた10月の上旬頃からで、その頃は保育園では園外保育(小遠足)や運動会等が行なわれ、集団訓練ということが保育カリキュラムの中心となつたところである。本児の場合このことが行動変化の一つの重要な誘因になったと考えて良いであろう。

入園初期において適応できなかつたということは、上に述べた両親の養育態度の影響によるところが大きいと考えられる。両親の態度の厳しさ、とくに父親の冷い厳しさは子どもにとって不可解であり、非常な圧力として受けとられていたと考えられ、その圧力を避けるために退避的な行動をとるようになり、それが更に保育園等の家庭より外の世界へ一般化されたのではないかと考えられる。事例Aに比較しての違いは母親の養育態度において認められ、本児の場合社会的な訓練は与えられていたこと、しかも情緒的な結びつきがやゝ強かつたことなどであり、これらが後の行動変化を生じさせる要因の一つとして効いていたと考えられる。この事例に見られる特徴は石黒等の結果によって支持されるものであろう。<sup>(3)</sup>

(4) 類型3. 社会的な関心の少ない子ども  
(Socially uninterested children)

事例C, 女兒, 1958年4月入園(3年保育), CA: 6才3ヶ月, IQ: 133, 家族構成: 父(38), 母(35), 姉(9)

第1期のリーダーシップに関しては独立的態度が5割を占めており、指導的・追随的態度および指導的態度もかなり多く見られる。社会的参与については連合・協同遊びが6割近くもあり、社会的接触においても他の孤立児に比してかなり発達した行動内容を示しており、積極的に活動している。この期間の具体的な行動内容をみると、園児室に備えてある「絵合わせ」で遊んでいることが多く、このかなり知的水準の高い遊びにおいては、本児は指導的にふるまっている。そして多くの場合その提案や指導が受け入れられていることが見られる。しかしながら、庭に出ての身体的な運動を伴う遊びにおいてはほとんど参加することなく、傍観するにとどまるか一人で遊ぶことが多くなる。

第2期にいたって、リーダーシップについては、独立的態度が増加すると共に、他の三つの態度が減少している。社会的参与については連合・協同遊びが著しく減少し、他の水準の低いと思われる行動が増加している。第1期にしばしば見られた、他の子どもと協同の「絵合わせ」はほとんどみられなくなった。社会的参与および社

## 孤立児に関する心理学的研究

会的接触での水準の低下はそのためであると思われる。「絵合わせ」以外の遊びにおいて、本児はぶらぶら歩きながら他の子どもが遊んでいるのを見てまわるということが多く、しかも別にそうした遊んでいる子どもの仲間に入りたがる気配もなく、何か超然として眺めているようにさえ思われる。社会的接触は他の子どもと遊ぶことが少なくなったために減少しており、それはとくに他の子どもへの提案や助力の点で著しい。また、指導的な態度をとることがあっても拒否されてしまうことが多い。

親子関係テストによると、母親はかなり統制が強く、厳しいしつけを行なっていると考えられる。しかし、情緒的な受容はされており、本児が母親に対して愛情欲求不満を持つことはない様である。救助の場面では全く拒否し、独立の場面ではほとんど受容していることから、子どもの独立性を強める方向でのしつけがなされていると考えられる。父親についても、子どもの独立性を認める傾向が見られるが、一方では服従的受容と支配とが共に多いことから、しつけ態度に一貫性が欠けている様であり、自由放任の傾向も認められる。

P F テストの結果は G C R % がかなり高く、精神発達は著しいようである。しかし  $\Sigma E$  % はかなり低く、この年令における適度の攻撃性を欠いていると思われる。一方  $\Sigma M$  % は異常に高くなってしまっており、「不満をとりつくろって他からの攻撃を避けようとする」傾向の著しいことを示している。N-P % がかなり高く、e % がやゝ低いことから、他人に庇護を求めたり依存したりすることが少なく、自ら問題の解決をはかりうとする傾向が強いと考えられる。全体として非常に進んだ精神発達の状態を示してはいるが、本児の場合そのことがかえってマイナスとして働き、子どもしさを失わせ、幼児集団への適応を困難にさせていると思われる。

園での種々の活動においては、非常に手際よくやってのけるが他の子どもを手伝ってやることもなく、他の子どもから手伝いを頼まれることもない。「芯はしっかりしているが陰気で大人の小型みたいな気がする」と保母は評している。彼女の在園期間は1960年10月現在で2年6カ月であり、1959年度4才のときは5才児のクラスで保育を受けた。そのことが知能の高さと相俟つて著しい精神発達を示すことになったと思われる。本児の場合、さらに、それがやゝ自閉的なパーソナリティ特徴と結びついて、同年令の子どもたちとの遊びに興味を失なわせたようである。

### (5) 類型4. 仲間から排斥されている子ども (Socially rejected children)

事例D、男児、1959年4月入園（2年保育）、CA：5才10カ月、IQ：119、家族構成：父(35)、母(37)

第1期において、リーダーシップについては独立的態度が極めて多く、社会的参与では平行遊びと連合・協同遊びとが同じくらいの比率で、そのほとんどを占めている。社会的接触をみると、他への働きかけも他からの働きかけも共に多く、積極的に他の子どもと交わっていることがわかる。しかし、その働きかけの多くが反撥や無視を受けており、また他の子どもから拒否されてしまったりも他の子どもを拒否することが多くなっている。

第2期においては、リーダーシップについては独立的態度および指導的態度が増加している。社会的参与については連合・協同遊びが著しく増加して、それ以外の行動はすべて減少している。社会的接触をみても全体として攻撃的傾向が減少している。特に他の子どもからの働きかけにおいて攻撃や強制の行動が減少し、依存や提案が増加している。これはこの期間における保育園での社会化が著るしかったためと思われる。

両親は親子関係テストにおいて、共にかなり高い欲求拒否の得点を示しており、問題多い関係のようである。母親については統制の強さ、特に支配的傾向の強さが見られるが、それ以上に情緒的な拒否の大きいことが注意される。とくに、親和の場面での拒否が大きく、子どもに対する愛情に欠けているのではないかと考えられるほどである。若干見られる受容的態度も服従的なものが多く、理性的な配慮にも全く欠けているということができる。父親は、母親との比較では情緒的な拒否は少ないが、支配的傾向は極めて強く、子どもに対する配慮なしに自分の思いのままに従わせようとする態度がうかがわれる。このような親子関係の中で、子どもは絶えず強い欲求不満にさらされていると考えられる。

P F テストの結果は G C R が非常に低い。外罰傾向は異常に強く、内罰傾向は認められない。無罰傾向も弱く N-P % も極めて低い。すなわち本児のパーソナリティ構造は非常に未発達であり、自我の強調性が強く、外罰的であり、自己批判の感情、反省心をほとんど持っていない様である。他から攻撃を受けた場合も必要以上の攻撃で「お返し」をすると考えられる。評点 e にプラスの反応転移がみられ、依存的欲求を意識的におさえていることも考えられる。

保母によると、本児は全く落着きがなく、やんちゃで素直さがない。友だちの遊び道具をとりあげたり、わけもなく身体的攻撃を加えることも見られた。第2期になってかなり望ましい変化が見られたが、未だ多くの問題行動を示している。

本事例は他の3事例に比してかなり特異であり、その行動においては社会的な相互作用が多く見られ、しかも他の子どもとの対立が多いことなど、孤立児群の一般的傾向よりも、むしろ嫌われ者の群の一般的傾向に近い行動を示している。この型が孤立児群の中に含まれていることについては次のような理由が考えられる。一つは、ソシオメトリック・テストにおける判断が先行経験をもとにしてなされるのであるが、一般に新学期には子どもの行動に大きな変化が生ずることがあるという事のために、その後の行動内容とは一致しないようなソシオメトリック・テストの結果が得られたのではないかという点である。今一つは、孤立児と嫌われ者との間の中間児ともいるべきものが孤立児群の中に含まれていたのではないかという点で、彼等に対してソシオメトリック・テストが十分な弁別力を持ち得なかったと考えられる。類型4の子どもは確かに行動の上では嫌われ者の群に類似しているが、PFテストの結果にみられるパーソナリティ構造の面では嫌われ者群の一般傾向とは異なって、孤立児群のそれと同様、精神発達の遅滞がみられ、その点で中間的存在ということができる。こゝでは、二つの理由が若干からみ合っていると考えるのが妥当であろう。

#### (6) ま　と　め

事例研究を行うことにより、孤立児に4つの異なる類型のあることが見出された。①社会的に未成熟な子ども、②社会的に引きこもりがちな子ども、③社会的な関心の少ない子ども、④仲間から排斥されている子どもの4類型である。各類型についてはTable 6に略記した。

#### [V] 結　　語

孤立児を他の子どもと比較した場合、その行動のレベルが一般に低く、パーソナリティ構造も未熟であることが示された。そしてそれらが親子関係の在り方によって強く規定されていることが示唆された。さらに事例研究によって、孤立児といわれる子どもの中に4つの類型のあることが見出され、それぞれに異なった親子関係、パーソナリティ構造の存在が示された。しかし、これらの結果は極めて限られた対象をもとにして得られたものであり、この結果のみから孤立児はこのようであると判断を下すのは早計であり、今後さらに多くの事例について検討を加えることが必要であろう。それと同時に、日々彼らに与えられている幼稚園教育の効果がどのように現われているか、また、学童期あるいは青年期への見通しはどうかといった点についての研究を進めることも必要であると思われる。

注) この方向に沿うものとして荻野の研究がある。<sup>(7)</sup>

#### 文　　献

- (1) Biehler, R. F. Companion Choice Behavior in the Kindergarten. *Child Developm.*, 25, 45-50 (1954).
- (2) Dunnington, M. J. Behavioral Differences of Sociometric Status Groups in Nursery School. *Child Developm.*, 28, 103-111 (1957).
- (3) 石黒大義他 幼児の社会性——発達に及ぼす家庭環境の影響——日本心理学会第22回大会発表論文集(1958)
- (4) Jennings, H. H. *Leadership and Isolation*. Longman, Green & Co., N.Y. (1950).
- (5) 小嶋秀夫 親子関係と幼児の社会化 教心研, 7, 200-209 (1960).
- (6) Northway, M. L. *Outsiders : A Study of the Personality Patterns of Children Least Acceptable to Their Age Mates*. *Sociometry*, 7, 10-25 (1944).
- (7) 荻野惺 孤立的児童の性格と親子関係——幼児期と学童期の比較研究——日本心理学会第27回大会発表論文集(1963).
- (8) Parten, M. B. Leadership among Preschool Children. *J. abnor. soc. Psychol.*, 27, 430-440 (1932).
- (9) Parten, M. B. Social Participation among Preschool Children. *J. abnor. soc. Psychol.*, 27, 243-269 (1932-33).
- (10) ピアジエ, J. 児童の自己中心性(大伴茂訳、同文書院、1954).
- (11) 住田・守坂他 制限投影法としての親子関係テストの試作I, II. 日本心理学会第24回大会発表論文集(1960)
- (12) 谷口喜久子 級内における孤立の原因に関する一研究. 松村康平編、児童理解の方法、148-150 (1958).
- (13) Young, L. L. & Cooper, D. H. Some Factors Associated with Popularity. *J. educ. Psychol.*, 35, 513-535, (1944)